

パブリックガーデンとしての和歌の浦

Wakanoura as the Earliest Public Garden in the Edo Age

米 田 頼 司
YONEDA Yoritsugu

2009年10月5日受理

〔目次〕

1. はじめに
2. 和歌の浦と開放性
3. 和歌の浦と共楽の系譜
4. 結語

1. はじめに

和歌の浦とは、どのような場所であるのか。和歌の浦が万葉集に詠まれた名所であることに異論の余地はない。また、平安期以降、最も知られた歌枕の一つであることも周知の事実である。和歌の浦が名所であり歌枕であり、歌道の聖地として存在してきたことは、自明の事柄に属す。

ただ、名所にしろ、歌枕にしろ、歌道の聖地にしろ、そのような場所としての性格付けは、和歌の浦の実際の姿、言わばその等身大の実像を明らかにするものではない。それだけでは、記号としての意味しか浮かび上がってこない。場所というものを社会事象であると理解するならば、その記号性は当然のこととして考えられねばならないが、場所は実態のない記号としてのみ存在するという訳ではない。実際のところ、その場所がどのようなものであるのかは、常に問われなければならないのである。問われることによって初めてその実像が明示化されることになる。場所は記号としてその存在を表すが、その内実は常に記号以上のものとして存在する。実際に生きられた場所は、常に解明されねばならない存在なのである。社会事象としての場所の内在的理解には、その生きられた現実相の解明が不可欠なものになる。

和歌の浦の場合、その記号性は際立って明瞭であるのに比して、その場所としての内実は明らかではない。古代の和歌の浦は勿論、中世の和歌の浦も私たちはその場所としての内実をほとんど知らずにいる。見るべき資料があまり存在しない状況下では、当然のこととも言えるが、ある程度の資料が存在する近世以降についても、その場所性とその生きられた内実は、これまで解明されてきたという訳ではないのである。

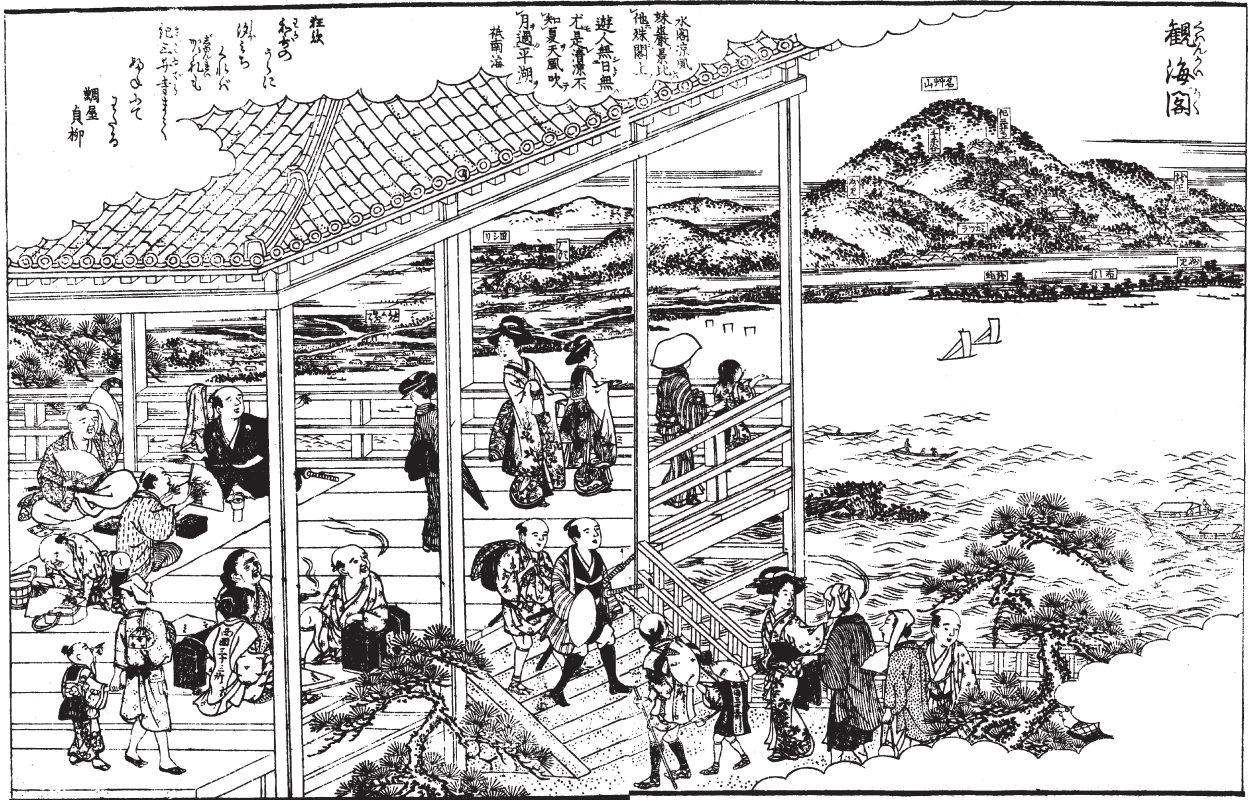
本稿は、和歌の浦を生きられた場所として把握する

試みであるが、この試みの時期的焦点を近世に定位させたものである。この時期的な絞り込みは、資料の存在でこうした試みが可能であるというだけでなく、近代以降の和歌の浦を生きられた場所として把握する課題を展望した場合にも重要な戦略となるからである。生きられた場所は常にその生成において、従ってまたその変容という相において把握されねばならない。従って、近代以降の様相を明らかにするためには、それに先立つ近世からの変容あるいは持続という歴史的観点が当然のこととして要請させることになるのである。本稿における時期の絞り込みは、このような戦略的な歴史的観点を踏まえてのものである。この意味で、本稿は、生きられた場所の歴史社会学の試みでもある。

2. 和歌の浦と開放性

近世の和歌の浦は実際にはどのような場所であったのか、言葉を変えればどのような場所として生きられていたのか、このことを知るためには、文字で記された資料ばかりではなく、少なからぬ絵画資料にも目を向ける必要がある。生きられた場所としての実際の姿を知るためには、この絵画資料の活用が有効になるのである。ただ、生きられた場所としての実際の姿を見るためには風俗を描いたものが重要となるが、和歌の浦の風俗を描いたものは決して多くはない。この点で、極めて重要な位置を占めているのが『紀伊国名所図会』である。『紀伊国名所図会』には、和歌の浦における風俗を描いた絵画とともにそれに対応する記述がある。

『紀伊国名所図会』は、文化8年(1811)に初編、翌年に二編、三編は天保9年(1838)、後編は嘉永4年(1851)と近世後期に40年に渡って刊行されたものであるが、『江戸名所図会』に先立ち、分量もこれをはるかに凌駕し、名所図会のなかで最大のものである。質



図Ⅰ 観海閣の図(『紀伊国名所図会』[臨川書店版])



図Ⅱ 吹上の浜汐干の図(『紀伊国名所図会』[臨川書店版])

的にも『江戸名所図会』に劣らないもので名所図会の白眉と言って過言ではない。この『紀伊国名所図会』を企画したのは帯屋伊兵衛こと、高市志友であり、初編と二編は自ら編述している。絵は西村中和で、各地の名所図会の嚆矢となった『都名所図会』の絵を担当した絵師である^(註1)。本稿で主に検討することになるのは、初編巻之二に収録されている和歌の浦の部分である。

城下町と隣接する吹上を取めた初編巻之一に続いて、巻之二は「高松茶屋」から始まる。巻之二全体が広義の意味では和歌の浦と見ることもできるが、巻頭の目次(「目録」)に照らして言えば、巡り歩く(遊覧)場所としての和歌の浦は、一応「五百羅漢寺」から始まるとみるのが妥当なところであろう^(註2)。この和歌の浦の部分で当時の風俗が描かれているのは、「観海閣」、「妹背海苔取図」、「(和歌祭)御旅所にて 相撲会」である。いずれも当時の風俗が見事に活写されている。

まず、「観海閣」の図(図I)をみてみよう。見開き2ページに渡って、観海閣と民衆、及び観海閣とそこからの眺望が一つづきの画面に収められている。西村中和の高い技量が遺憾なく発揮されている見事な図である。観海閣上にいる人々に目を向けると景観を眺めている親子連れ、床に毛氈のようなものを敷いて酒宴を設けている一行、座り込んで休息をとっている西国三十三所めぐりの巡礼一行がいる。酒宴の一行は、なにやら近くの女性に声を掛けている。如何にも和やかな光景である。階段を下りて観海閣を出てゆく旅人と入れ違いにこれから観海閣に上がろうとする巡礼父子がいる。その後ろには、これから酒宴でも構えるのであろうか、粋な風情の一行がいる。大勢の民衆が自由に観海閣を利用し、和歌の浦の景観を堪能しているのである。どことなく浮き浮きとした開放的気分が自ずと伝わってくる。西村中和が実地に足を運び、観察することではじめて描くことのできた和歌の浦における民衆遊楽の図ということができようであろう。

この図には以下のような対応する記述がある。

「国祖君御造営あり、三つの橋をわたり、山のめぐりは石を畳みて平地とし、山上には宝塔高く聳え、石段くだりて水楼あり。みなみは名にあふ和歌のうら、東面は名草山なり。山水絶妙、言語に絶えたり。かかるやごとなき御制地なるも、下民の遊翫をゆるされ、四季をりをりの間断なく、ここにつどひあつまり、おのがさまぎまたのしみ興ず。或人は文王の囿に比す、また宜ならずや」(歴史図書社版(一) 267頁)

「水楼」というのは観海閣のことである。これを含めてこの場所が初代藩主頼宣の「御造営」であるといい、この場所から眺めることのできる和歌の浦の景観を「山水絶妙、言語に絶えたり」としている。そして、「かかるやごとなき御制地なるも、下民の遊翫をゆる

され、四季をりをりの間断なく、ここにつどひあつまり、おのがさまぎまたのしみ興ず」としているのであるが、先にみた図は、この場所の際立った開放的状况(場所性)を活写しているのである。

『紀伊国名所図会』には、場所は和歌の浦ではないが、浜辺で潮干狩りに興じている場面が描かれている(図II)。「吹上の浜 汐干」というのがそれで、場所は、現在の花王(和歌山市湊)の敷地内になっているところから地先の浜辺あたりであろう。画面手前の少し高くなった松林のある土手では、縁台を並べてた会食風景が見られる。潮干狩で獲れた貝などが早速焼かれて食されているのであろうか。干上がった遠浅の浜では見晴るかす沖まで大勢の人々が潮干狩りに興じている。庶民のみならず、中には武士一行らしき一団もいる。この図には以下のような対応する記述がある。

「こゝの上巳の汐干には、住吉にかはらず、淡路島も手にとる如く、駕かりて淡路へ行かんおもひありて、手毎に熊手・鎌やうのものをもちて、大名の奥方も、素足してすそをからげ、賤の女は、茜の赤うらを見せて汐にひたり、蛤・浅利貝・鳥貝などを拾ふ。こゝより大浦といへるまで、人ならぬ所もなく、茶屋・煮売店のかげろふをあらそひ、飽くまで春色にふけりてかへるさをわする。」(歴史図書社版(一) 174頁)

春の潮干狩りとその賑わしい情景が手にとるようによく分る。古代に遡る春の磯遊びとともに年中行事化している潮干狩りに城下の人々が一日時を忘れて打ち興じている情景は、「観海閣」の図と通底している。この「吹上の浜 汐干」の図に描かれた情景とかかわって、興味深い記録が『類集略記』に残されている。

「(文化三年〔1806〕)二月晦日

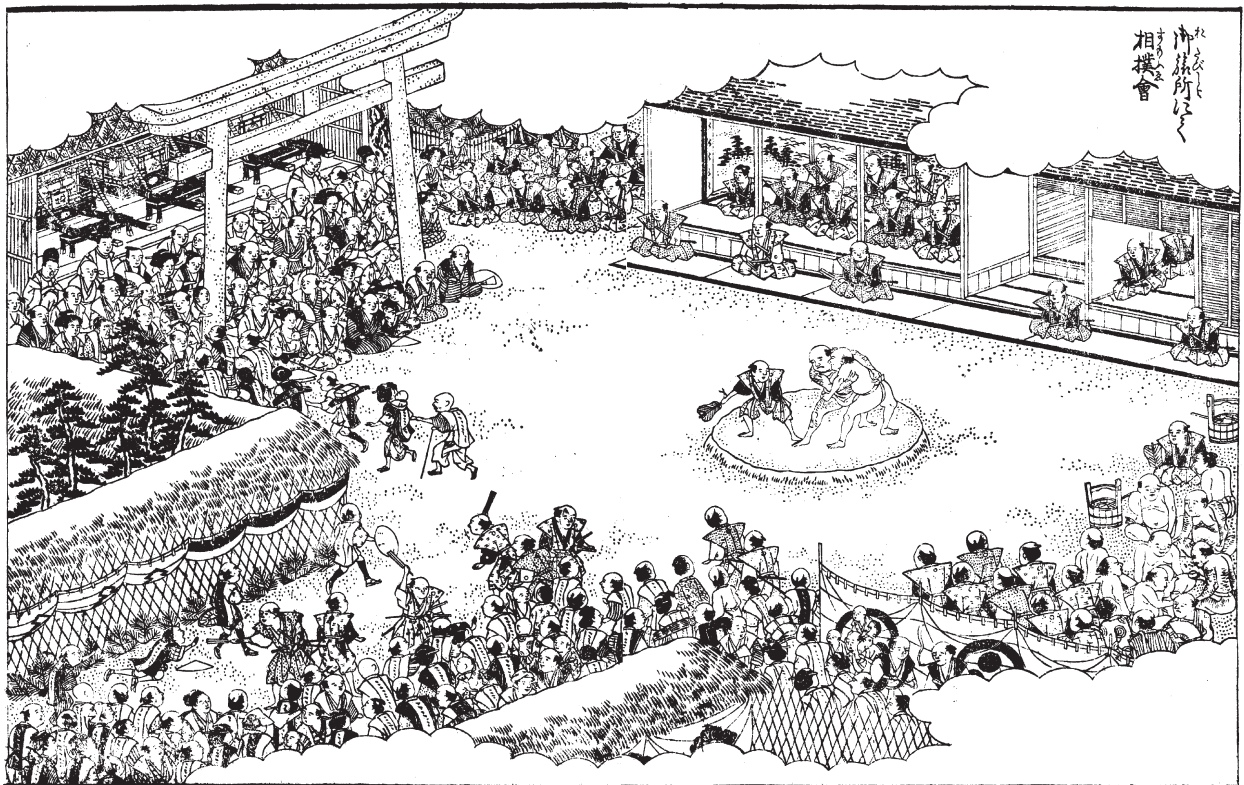
一 水軒後沖手堤辺江、毎年延気ニ罷越、石垣、并吹垣等踏荒候輩も有之趣ニ付、被仰出品之事、」^(註3)(『和歌山市史研究』和歌山市立博物館編 第32号 2004年 35頁 所収)

「吹上の浜 汐干」の図には描かれていない土手の更に左側には、延々と壮大な水軒堤防の石垣が南へと延びていたと思われるのであるが^(註4)、この石垣に対しては、「石垣、并吹垣等踏荒候輩も有之趣ニ付、被仰出品之事」とされている。それがどのようなものであったかは記録がないので分らないが、何等かの規制措置が考えられているのである。石垣は藩が築造したものであり、その機能も防災上のものであったと思われる。民衆の「延気」に供すべきものではなかったであろう。この石垣が踏み荒らされることが問題になっているのである。民衆の視座からは、潮干狩り(「延気」)の折に浜の続きにある石垣を利用することに、なんら問題はなかったはずであるが(石垣を壊すなどということはまずあり得ない)、藩の立場では容認できなかったのである。場所に対する見方が異なっているのでは



図Ⅲ 妹背海苔取図
(『紀伊国名所図会』〔臨川書店版〕)

干潟でかいがいしく海苔を取っているのは、和歌村の人々であろうか。子どもたちも駆り出されている。旅人が、この様子を妹背山の岸から見遣っている。和歌の浦におけるのどかな海苔取り風景である。



図Ⅳ 和歌祭御旅所における相撲会の図(『紀伊国名所図会』〔臨川書店版〕)

る。石垣は、民衆に対して開放されるべき場所ではないのである。「吹上の浜 汐干」の図には描かれていない石垣堤防の存在を念頭におくと、「観海閣」の図と「吹上の浜 汐干」の図は、興味深い一対をなしていることが分かってくる。一方には、藩によって民衆に開放すべきものとして整備された遊覧のための施設とそれを何らの屈託もなく利用する大勢の民衆の姿があり、他方にも自然の浜で年中行事化した春の潮干狩りに打ち興じる民衆の姿がある。しかし、この浜では、藩によって築造された石垣は民衆に開放されるべき場所とは考えられていなかったのである。このような対照性は、観海閣のある妹背山、更には和歌の浦が特別に意味づけされた場所であることを物語っている。このような和歌の浦の特筆すべき場所性にかかわることが、「かかるやごとなき御制地なるも、下民の遊翫をゆるされ、…」と記述されるようになっていたのである。

観海閣のある妹背山は、頼宣により慶安から明暦に掛けて整備されており、観海閣は慶安4年（1651）には建造されていたものと考えられる。ケヤキづくりで6間×3間と広く、庭園に置かれる東屋風のものではない。大勢の民衆が、「四季をりをりの間断なく、ここにつどひあつまり、おのがさままたのしみ興ず」ことを可能にするスペースがある。観海閣は、その当初から「下民の遊翫」のための施設として建造され、民衆に開放されていたと考えられるのである^(註5)。

先の記述は、こうしたことをとくに「或人は文王の囿に比す、また宜ならずや」としている。「文王の囿」の故事は、『孟子』の冒頭で引かれているもので^(註6)、かつて周の文王（覇道〔武力による治世〕ではなく王道による治世〔徳治〕を行ったとされる）が庭園を作ろうとした折に民衆が進んでこれにあたり、文王は民衆ともどもにその庭園の佳境を楽しんだ（共楽）というのであるが^(註7)、先の記述は、観海閣（とそれがあつた和歌の浦）を「文王の囿」に例えたのに対して、まさしくその通りであるとしているのである。

このように和歌の浦が民衆に開放された場所であったことは、「妹背海苔取図」（図Ⅲ）においても見てとることができるし、「（和歌祭）御旅所にて 相撲会」の図（図Ⅳ）においても見る事ができる。とくに「（和歌祭）御旅所にて 相撲会」は興味深い。見開き2頁の図であるが、丁度御旅所の鳥居前の広場で相撲が取られているところである。三基の神輿はすでに御旅所鳥居内の仮屋に収まっている。相撲を正面にみる仮屋では、画面に向って右側には藩主が着座し、左側には重臣や僧正が列席することになっている^(註8)。和歌祭における御旅所での式次第に関する記録がなく、相撲会のあと、どのようなことがどのような順序でとり行われるかは判然としないのであるが、この後に呼び物であった各種の練物の披露が行われたことは、間違いない。鳥居のところに座して居並ぶ群衆も、渡御行列の

往還路に溢れかえっている巡礼姿の群衆も、お目当ては練物である。和歌祭の場合、他の東照宮祭礼ではあり得ないことであったが、渡御行列が往還する道筋も、巡礼であれば祭礼時においても自由に往来することが許されていたのである。文化4年（1807）の記録には、御旅所の警備にあたる役人に対して「民衆をがさつに扱ってはならない」という指示が出されている^(註9)。ただ、あまりの雑踏で藩は文政12年（1829）に民衆を御旅所から締め出す措置をとったのであるが、かえって大勢の民衆が巡礼となって殺到したことから翌年には元に戻されている^(註10)。こうして、「（和歌祭）御旅所にて 相撲会」の図は、藩主と家臣、更には民衆が一同に会する和歌祭の一場面を描いたものとして大変重要であると同時に、和歌の浦における民衆への開放性を明瞭に読み取ることのできるものにもなっているのである。

近世の和歌の浦については、従来、徳川氏の聖地とすべく囲い込むような形での整備がなされたとの理解もあったが（藤本清二郎 1989、1993、高橋修 1990）、そうではなく、「やごとなき御制地」であったにも関わらず、民衆に開放されていたのである。近世における和歌の浦の場所性は、民衆に対する開放性においてこそ把握されねばならないのである。

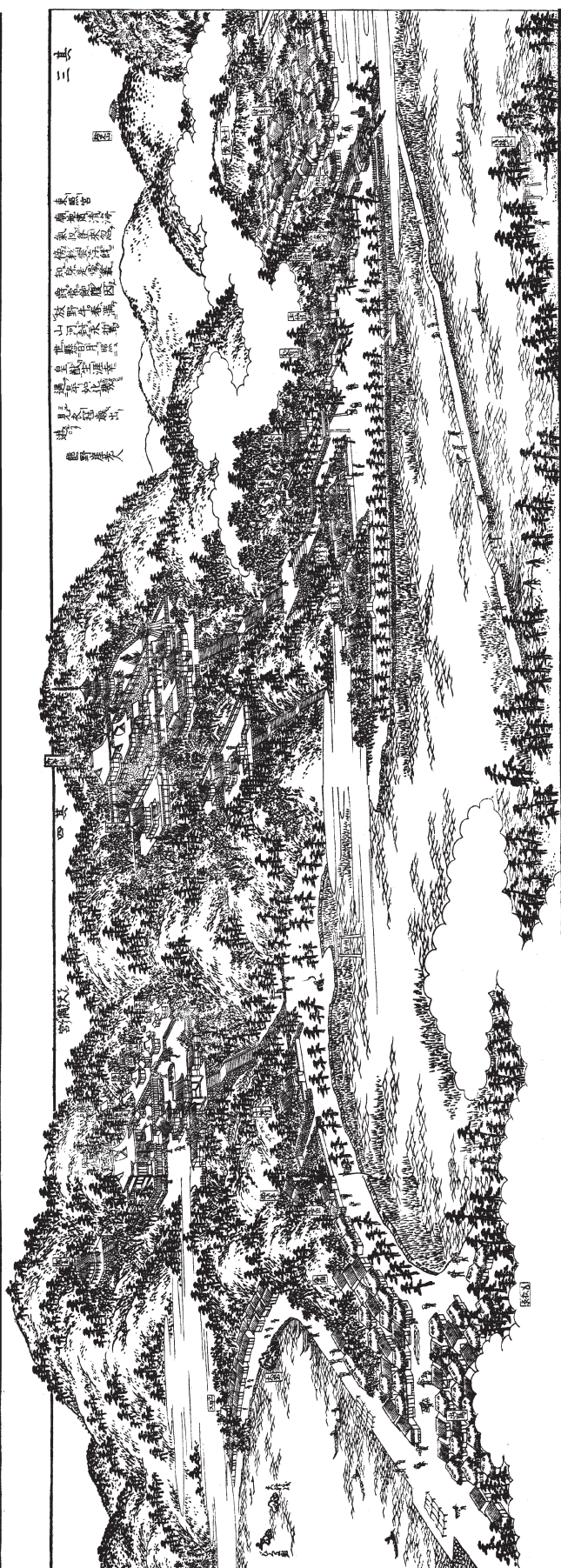
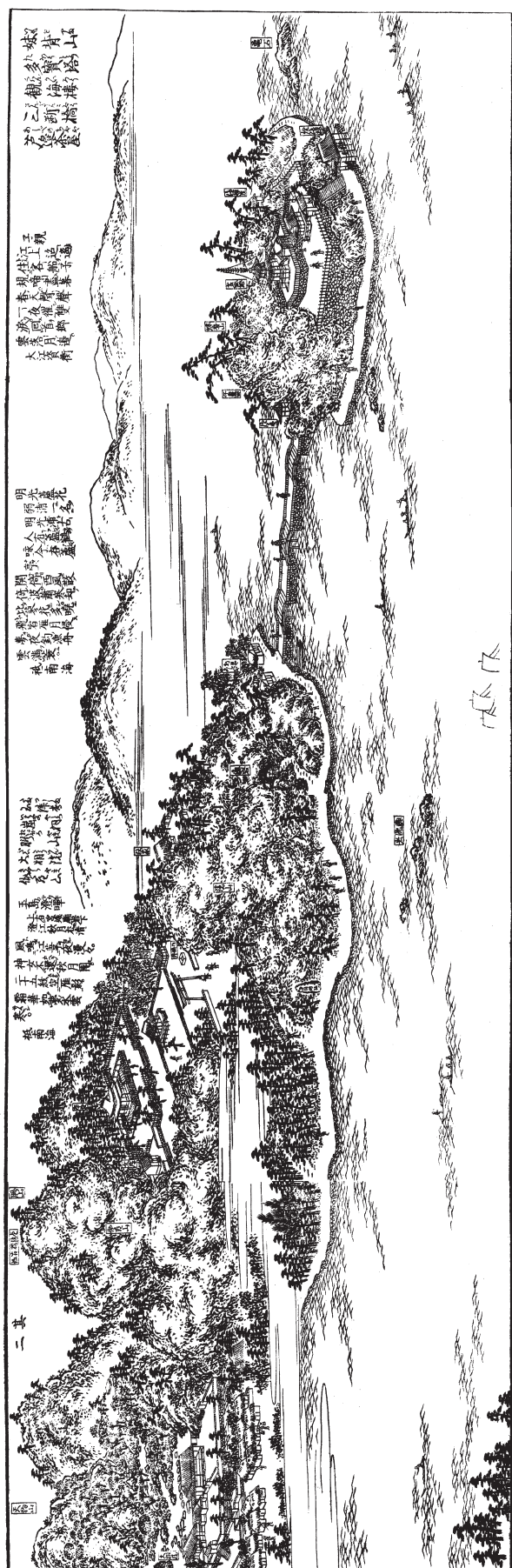
このような民衆に対する開放性は、勿論、観海閣あるいは和歌祭に限られたものではなく、頼宣の命を受けて作成された『紀南郷導記』（テキストの完成は概ね元禄年間と考えられる^(註11)）には、貴賤の区別なく人々が花見で東照宮の楼門の内まで入っていることが記されている。

「御宮（東照宮）ノ右手ノ方ニ御供所有リ。此並ビニ石ノ手水鉢有リ。此際ニ大木ノ桜有リ。御手水鉢ノ桜ト云フ。色香秀逸ナレバ花ノ頃ハ貴賤群ヲナセリ。」（池永浩監修、楠本慎平編『紀南郷導記』1967年 13頁）

幕末の巡礼の日記には、唐門から入り東照宮の拝殿の周囲にある燈籠に刻まれた藩重役の氏名までも写しとっていたことが記されている^(註12)。また、貝原益軒（『南紀紀行』）や菅沼逸（俳人菅沼曲水の妻。『岸和田紀行』）は東照宮の別当である雲蓋院の庭園を鑑賞しているし、『友が島紀行 附和泉の紀行』（文化10年）にも旅すがら大相院の庭園を鑑賞したことが記されている。旅人に寺院の庭園が公開されていたのである。別稿（米田頼司 2010）で述べたように、頼宣は和歌の浦を天下泰平（「徳川の平和」）を祈願する聖地とすべく、茶屋を設け、民衆が自由に利用できる遊覧・遊興のための施設を配置することで、積極的に民衆を和歌の浦に呼び入れようとしたのである。

こうして近世の和歌の浦は、民衆に開放されるべく整備されたのであり、大勢の民衆が巡り歩くことのできる「開かれた園地」、即ちパブリックガーデンとして

図V 和歌の浦図(『紀伊国名所図会』[臨川書店版])





図Ⅵ 下馬橋(図Ⅴの部分図。東照宮に行く際にわたることになる。東照宮側には透き垣様の設えがあるが、戸は付けられておらず開放的である。)

整備されたとみることができるのである(図Ⅴ、図Ⅵ、図Ⅶ)。

3. 和歌の浦と共楽の系譜

近世において藩や幕府が領有し整備した場所(施設)で、和歌の浦のように民衆に対して開放されていた例が他にあるのであろうか。

こうしたことに関わる調査研究はこれまであまり行われておらず、筆者もその途上にあるが、現時点で筆者が把握している限りでは、近世初期に民衆に対して無条件に開放されている例は、和歌の浦以外にはない。

小野佐和子氏は、藩主によって造成された園地の開放性という点に関して次のように述べている。

「園地は、眺望のよい小山に藩主の別荘として造成される場合の多いことに気付く。したがって園地の公開の有無は藩主の意志に帰される。公開される場合にも公開日数は限られ、園地は原則として役人の管理下にある。つまり領民は藩主の庭園を拝見するのである^(註13)」(小野佐和子 1983 2頁)

和歌の浦の開放性は際立っているのであるが、幕府が整備したところを民衆に開放したものとしてよく知られているものに、吉宗が八代将軍となって江戸で行った名所づくりがある。この中でとくに飛鳥山は本稿の議論との関係で重要な意味を持っている。

飛鳥山は将軍家の鷹場であるが、元々豊島氏によって飛鳥明神社が祀られていたところであり、周辺には由緒旧跡が多い。家康が日光に祀られるようになると日光東照宮社参の御成道が通ることになる。家光はこの地で度々鷹狩をしており、それに伴い周辺の整備も進められた。後の吉宗の飛鳥山整備はこうした事蹟を踏まえたものであった(北区飛鳥山博物館 2008、小野良平 1988)。

吉宗は将軍になると、ほどなく鷹場の造園整備を始める。享保2年(1717)の隅田川堤を手始めに品川の



図Ⅶ 天満宮前(図Ⅴの部分図。干渴の中に立つ鳥居の前の小広場における休息風景。)

御殿山、飛鳥山、中野と続く。江戸とその周辺の計画的な園地整備と考えられているのであるが、とくに飛鳥山に明瞭に見られるように、その整備方針には民衆への開放ということが位置づけられていた。飛鳥山では桜を中心にした植栽と周辺の施設配置(茶屋の設置)が続けられ、享保18年(1733)、こうした園地開発が整ったところで、民衆が自由に利用できる形で開放する措置がとられた(東京都公園協会編 1989、田中正大 1974、佐藤昌 1977)。吉宗のこうした園地開発と民衆への開放事業は、「民と楽をとものにす」という共楽の理念によるものであったとされる(小野良平 1988、北区飛鳥山博物館 2008)。

「其日飛鳥山を官地になしをかるるにより、人はばかりて花見にくる人なし、衆と共に楽しむ意に应ぜず、金輪寺に下し給はるべきよし、上意あり。其後日をへて、寺社奉行大岡越前守より、表立て上意を傳ふ。さて其盛挙を碑にしるして立られければ、この山看花の境となりて、春ことに花見る人、貴賤老若おしなへて花間に群聚をなし、糸竹酔歌の音、朝より夜をかけてたゆる事なし。げに太平の歓楽、盛世の風致といふべし。」(成島和鼎「飛鳥山碑始末」^(註14)。ゴシックは筆者。)

このような吉宗の「共楽の事業」は、明治以降の公園制度の先駆としても評価されるところになっているが(東京都公園協会編 1989、田中正大 1974、佐藤昌 1977、丸山宏 1994)、近世期に他にどのような影響をもたらすことになったのか、その全容は明らかになっていない。ただ、吉宗の孫で寛政の改革を断行した松平定信が白川藩主となって行った南湖の造成事業は、吉宗の「共楽の事業」を継いだものであったと考えられる(佐藤昌 1977、高垣博 2001、池澤一郎 2006)。

寛政の改革に挫折し、白川藩主となっていた松平定信は、低湿地帯の開発のために南湖を造成する(竣工は享和元年[1801])。ただ、この南湖は利水のためば

かりでなく、風光明媚な名所となし、「士民共楽」の園地として整備された。定信は作庭に造詣が深かったが、飛鳥山の「飛鳥山十二景」にならって「一七勝一六景」を選定し、同じようにこれを歌にし漢詩を詠んでいる。そして、南湖北側の鏡山の麓に八畳二間、三方に縁側をめぐらした一棟を設け、これに共楽亭と名付け、身分の区別なく開放した。和歌の浦で言えば、観海閣に相当するが、この共楽亭こそ、南湖のシンボルとして建てられたものであった。定信は、

山水の高きひききも隔てなく

共にたのしき円居すらしも

との歌を残し^(註15)、南湖開鑿碑には、「而漑田肥民、与衆泛舟、可以娛太平無事也（田に水をそそぎ、民衆と舟を浮かべて、以って太平無事を楽しむべしなり）」とその由来が刻まれている^(註16)。また、実際に民衆には年間を通じて開放され、南湖は文字通り「士民共楽」の場所になっていたという（白河市歴史民俗資料館編2001）。

先に見たように近世初期における和歌の浦の整備は、民衆への開放性という点で際立った存在感を示すものであるが、近世中期から後期にかけて、飛鳥山（吉宗）— 南湖（定信）という共楽の系譜とでも言うべきものが見出されるのだとすれば、和歌の浦は、この共楽の系譜の起点に置かれるべきものになろう。というのも、吉宗は紀州藩主になってからは勿論、藩主になる以前から和歌の浦には親しんでおり^(註17)、観海閣をはじめ開放的に整備された和歌の浦をつぶさに見て育ったと考えられるからである。祖父頼宣による和歌の浦の開放的整備の有り様、即ちパブリックガーデンとしての和歌の浦の有り様が、それを熟知していたであろう吉宗によって引き継がれ、江戸における開放的園地の造成に結実したとして、何らの不思議もないのである。

4. 結語

衆楽や偕楽を称する庭園あるいは園地は少なからず存在するが（その開放性ほとんどが士分におけるものであって民衆にまで及ぶものではなかったが）、そうしたものが新たに着眼されるべき和歌の浦 — 飛鳥山 — 南湖という近世を通じて一筋に連なる共楽の系譜と同方向の理念・思想に連なるものであったとすれば、和歌の浦における開放的整備は、こうした動向全体の最初に位置するものになろう。「御制地」の民衆への開放が図られたパブリックガーデンとしての和歌の浦が、改めて注目されねばならないのである。そして、共楽の系譜が、明治維新後、未だ西欧の公園制度が導入される以前に公園設置の核になったのだとすれば、この系譜の起点となり、原点に置かれるべき和歌の浦の場所性の生成への問いは、日本における公園成立を考える場合に不可避なものになるのである（飛鳥山は

明治6年の太政官布告で公園となり、南湖も明治13年に、和歌の浦は明治28年に公園となる。西欧近代の公園制度がまだ導入される以前のことである）。

和歌の浦の場合、明治維新で藩が崩壊すると荒廃が進むことになるが、和歌村村民はこれを座視することなく、その歴史的環境の保全を図っている。明治28年の和歌の浦の公園化は、和歌村村民によって請願されていたものであった。民衆のこのような動きは、共楽という近世的理念状況とは如何なる位相にあるのか、あるいはまた、近世から近代へという名所の歴史的変容のなかでどのような意味を有することになるのか、いずれも日本における名所と公園の関係性及びこの関係性の近代的展開を考える上で解かれるべき重要な問題となる。

かくて、近世～近代における和歌の浦の場所性の生成と変容の内実は、近世及び近代以降の日本の名所、園地、公園の生成と変容を考える場合に、解明されるべき最も重要な戦略的課題の一つと考えられねばならないのである。

注

1. 『紀伊国名所図会』及びこの出版に関わることでは、須山高明氏、高橋克伸氏、江本英雄氏の研究がある（後掲文献リスト参照）。本稿における関連した記述は、とりわけ江本氏の書誌を中心とした詳細な研究に負うところが大きい。
2. 『紀伊続風土記』の「和歌浦」の項には、「(五百) 羅漢寺」、「秋葉権現社」、「愛宕権現社」が入れられている（歴史図書社版 第一輯 471～501頁参照）。
3. この『類集略記』（文化三年〔1806〕）二月晦日の条の記録は、水軒の石垣堤防のことが記されているものとしては、これまで確認されている唯一の文書史料である。
4. 道路拡幅工事に付随して2005年に再発見され、その後和歌山県文化財センターによる発掘調査等が行われた結果、水軒堤防の全容がほぼ明らかになっている。それによると、水軒堤防は石堤（石垣）とその背後陸側の土堤により構成され、石堤の断面形状は台形で、前面海側の石積みは切り込み接ぎ、布積みの高度な石材加工、築造技術が用いられている。石堤の高さは約4mで、全長約1kmに及ぶ。このような石堤遺構は日本では他に例がないという。石堤の築造時期は現在出土している遺物などを元に考証されている。18世紀半ばから後半に至る可能性が指摘されているものの、まだ結論を見るに至っていない。先の『類集略記』における文化3年（1806）の記録にはこの石堤が登場するわけであるが、文化8年（1811）に刊行された『紀伊国名所図会』には描かれていない（西村中和の絵は、『類集略記』に記録がある文化3年〔1806〕とあまり年月の隔たりがない文化2年～7年〔1805～1810〕に描かれたと考えられる〔江本英雄2005 56頁〕）。

因みに『紀伊続風土記』には水軒堤防につき次のような記述がある。

「浪打際より二町許にして高き砂山長堤を築くか如く南の方古川口に起りて逕迤として西北に連り今の川口に至りて盡く其長三十町許南の方は西濱村鎮にして北の方は湊領なり長堤の上長松萬株駢列して蒼翠掬すべし其下浪打際に至りて白砂雪の如く清潔諭ふるに物なし（中略）」

海濱貝数種あり晴日郡下の士女多くこゝに遊びて貝を拾ふといふ。」(歴史図書版 (一) 456頁)

『紀伊続風土記』は天保10年(1839)に完成しているが、この部分は文化11年(1815)には成文化していたとされる。しかし、ここには石堤の記述はなく、「高き砂山長堤を築くか如く南の方古川口に起りて逕迄として西北に連り今の川口に至りて盡く其長三十町許」とある。この記述がなされたときには、今回再発見されたときの状態のように石堤は砂に埋もれていたものと思われる。昭和初期には石堤は露出していたといい、石堤は砂に埋もれたり露出したりをくり返してきたのかもしれない。

『紀伊国名所図会』における絵が描かれたときにも砂に埋もれていた可能性は否定しきれないが、いずれにしても描かれているところは景観からみて、土堤様のものがあつたにしても石堤はなかった湊と、その地先の浜であると考えられる。構図上、石堤のあったところは画面には入れられなかったということになる。

5. 造園史家田中正大氏の、和歌の浦景観保全訴訟における以下の法廷証言は、観海閣の特徴を明らかにしたものである。その論旨は、本稿の導きの糸にもなっている。

「この観海閣の性格というのは、休憩所とか、展望台とかそういう感じですね。で、日本でいいますと東屋みたいなものになって、非常に小さくて、かやぶきにしたり、わらぶきにしたり、板ぶきにしたりと軽やかな建物というのが普通なんです。が、観海閣は屋根は入母屋形式で、本瓦ぶきになっていますね。ものすごく重厚な建物なんです。それで大きさも非常に大きい。」(和歌の浦景観保全訴訟の裁判記録刊行会 1996 81頁)

「(本稿の図Ⅰと同じ図を見て)この建造物が市民に非常に親しまれていたということですね。これを見ますと紀三井寺へ行く人は大体ここに寄って行く。住民もここを利用した。一般に開放されて利用されている点は、現在の公園の施設と全く同じで、特記すべき所じゃないでしょうか。」(和歌の浦景観保全訴訟の裁判記録刊行会 1996 82頁)

6. 『孟子 巻第一』の「梁恵王章句上」に次の下りがある。
「詩に云う、〔文王〕靈台を經始す。之を經(度)り、之を營(縄張)り、庶民之を攻(治)め、日ならず(幾日も経ず)して之を成せり。經始亟(促)す勿きも、庶民子のごとく来れり。王靈囿に在り、麀鹿の伏す攸。麀鹿濯濯たり。白鳥鶴鶴たり。王靈沼に在り、於初(満)ちて魚躍ると。文王民の力を以いて、台を為(治)め沼を為(作)りて、民之を歡樂び、其の台を謂て靈台と曰い、其の沼を謂て靈沼と曰いて、その麀鹿魚鼈有るを樂しめり。古の人は民と偕に樂しむ。故に能く樂しめるなり。」(『孟子(上)』(小林勝人訳注 岩波文庫)の読み下し文[36~37頁]より)
7. 「文王の囿」の故事に関わるところでは、松村巧和歌山大学教育学部教授のご助言を頂いた。
8. 「和歌御祭礼御覧所之図」(『南紀徳川史』第15冊 所収)及び「紀州和歌浦雲蓋院御道絵図」(個人蔵)による。
9. 文化4年4月24日付の記録には、次のようなものがある。

「左の書付、御目付中御渡し被成候、
御徒目付組頭
御徒目付
御祭礼初都而群衆いたし候場所ニ而制止方之儀、かさつニ無之様行届制止いたし、且つ差図等いたし候儀者勿論之事ニ候へ共、若心得違かさつ成る差図等有之候へ者、御役柄不束ニも有之候間、向後猶更右体之儀相聞不申様、兼

而行届入念相勤可申候、」(「和歌御祭礼筋 恵順」田中敬忠『和歌祭の話』 1979年 179頁 所収)

10. 文政12年(1829)の和歌祭(4月17日)では「他所者・雑人等一切」御旅所への立ち入りが禁止されたのであるが、『類集略記』(文政12年4月27日の条)には、それが早々に撤回せねばならなかったことが記されている。

「此度和哥 御祭礼之節 御旅所江他所者・雑人等一切入レ不申様御申聞候付、右之通取計至極行届候事候、然レ共他所者并御国者ニ而も順礼等ニ罷出、笈づるなど懸ヶ、御旅所拝見致度との儀ニ而往来致来候者を差留候而ハ、何とか不宜候付、来年ハハ已前ニ復し、右他所者等者往来致させ、尤拝見相済候ハ、立戻り候様申聞させ、人数多キ事ニ候得ハ、一々難行届儀も可有之候得共、先右之振ニ相心得、統へ申合候様、御小人目付へも」(『和歌山市史研究』和歌山市立博物館編 第35号 2007年 17頁 所収)

11. 『紀南郷導記』の成立については、「兄玉莊左衛門について一紀南郷導記の成立年代一」(池永浩監修、楠本慎平編『紀南郷導記』1967年 所収)を参照願いたい。
12. 巡礼によって写し取られた拝殿周りの灯籠に刻まれていた以下の氏名は、現存のものとは一致している。

「東照宮御国家拝礼
左之方ニ 水野出雲守重央 石ノ燈籠二ツ有之
同 松平三郎兵衛忠政 同一ツ
同 久野丹波守宗成 同二ツ」(『西国順拝名所記』(自芳尼 安政元年 青柳周一「史料紹介 自芳尼『西国順拝名所記(一)』」『滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要』No36 2003年 109~119頁 所収)

13. 小野佐和子氏は、和歌の浦の「妹背山」について、「初代藩主徳川頼宣が建てた別荘の庭を公開した。文化の頃にもなお存続し、年間を通じて遊覧者からみられた。」(小野佐和子1983 2頁)としているが、「初代藩主徳川頼宣が建てた別荘の庭を公開した」というのは、何かの錯誤によるものであろう。
14. 『東京市史稿 遊園篇第貳』東京市役所編纂 1929年 所収119頁。表記は一部改めている。
15. 「文政三年八月南湖十七勝十六景詩歌碑」の一つで、現在、南湖の共楽亭の脇に立てられている。
16. 現在、南湖にあり末尾には、「文化元年秋八月十有一日、白川府儒員広瀬典記并書」とある。
17. 吉宗は幼少の頃から和歌の浦で挙行されていた和歌祭を見ていることが記録に残されている(『年中日記』の元禄2年(1689)―吉宗5歳―4月17日の条と元禄3年(1690)―吉宗6歳―4月17日の条)。

文献

- | | | |
|-------|--------|---|
| 池澤一郎 | 2006年 | 「定信の風流を支えた人々―南湖詩碑建立をめぐって―」『文学』第7巻・第1号 岩波書店 152~173頁 |
| 小野佐和子 | 1983年 | 「『衆楽』の意味するもの」『造園雑誌』46巻 5号 1~6頁 |
| 小野良平 | 1988年 | 「飛鳥山にみる名所づくりの思想」『造園雑誌』51巻 5号 13~18頁 |
| 江本英雄 | 2000年 | 「印刷本『紀伊国名所図会』諸本と版本の異同の一例」『和歌山 地方史研究』38 61~64頁 |
| | 2004年A | 「『紀伊国名所図会』出版の背景(一)」『和歌山 地方史研究』47 33~54頁 |
| | 2004年B | 「『紀伊国名所図会』出版の背景(二)」『和歌山 地方史研究』48 60~71頁 |

	2005年	『紀伊国名所図会』出版の背景(三)』『和歌山 地方史研究』49 45～64頁			信と庭園—南湖と大名庭園—』白河市歴史民俗資料館編 2001年 所収
北区飛鳥山博物館			高橋 修	1990年	「紀州東照宮の創建と和歌浦」『特別展図録 紀州東照宮の歴史』編集発行和歌山県立博物館 59～89頁 所収
	2008年	『名所の誕生—飛鳥山で読み解く名所プロデュース—』東京都北区教育委員会発行	高橋克伸	2003年	「城下町和歌山の出版文化に関する若干の考察」『城下町和歌山の本屋さん—「紀伊国名所図会」を中心に—』和歌山市立博物館 2003年 所収
佐藤 昌	1977年	『日本公園緑地発達史(上)』都市計画研究所発行			
白河市歴史民俗資料館編			田中正大	1974年	『日本の公園』鹿島出版会
	2001年	『定信と庭園—南湖と大名庭園—』	東京都公園協会編	1989年	『(前島康彦著) 東京公園史話』東京都公園協会発行
須山高明	2000年	「近世紀州の『書商』」『和歌山 地方史研究』38 14～28頁	藤本清二郎	1989年	「近世和歌の浦の歴史景観—その形成と変容過程—」『和歌山 地方史研究』17 8～21頁
	2003年	「城下町和歌山の出版と書商の営業形態」『城下町和歌山の本屋さん—「紀伊国名所図会」を中心に—』和歌山市立博物館 2003年 所収		1993年	「紀州徳川家と和歌の浦」『和歌の浦 歴史と文学』(和泉書院) 所収
須山高明、高橋克伸			丸山 宏	1994年	『近代日本公園史の研究』思文閣
	1996年	「紀伊国名所図会 解説」『紀伊国名所図会』(版本地誌大系9) 臨川書店 1996年 所収	米田頼司	2010年	『和歌祭—風流の祭典の社会誌—』帯伊書店
高垣 博	2001年	「南湖の『士民共楽』と江戸の飛鳥山」『定			